

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

魔が堕ちる 王夜

デーモニックハンツマン



小説 譚 堂

挿絵 笹 弘

序章	007
第一章	The Case of Demonic Floret 017
第二章	ノーブル・ベルセルク 052
第三章	逆襲のシエリス・ザ・ブラックアート 090
第四章	退魔の薬指 125
第五章	地下拷問室の砂時計、享樂と猛毒の淑女 164
第六章	母猫陥落遊戯 202

登場人物紹介

Characters



シェリスエルネス・ザーバツハ

魔王ザーバツハの、十人の子の一人。勝ち気で執念深く、受けた恨みはきっちり百倍にして返す主義。

きどあかね 木戸 茜

退魔師の少女。直情径行でケンカっ早い。

ランセリィ・K・シェリスエルネス

フタナリ化した茜がシェリスに産ませた少女。なお、名字にあたる場所に親の名前を持つてくるのは魔界の風習。

ヴェゾフィアンカ・ヘルペー

シェリスの友人にして仇敵。病んだ嗜好の持ち主。

ギルバ

魔神。シェリスの力を利用して権勢を取り戻そうとした。

メデューナ

ギルバの眷属。水術を操る。芸人気質の楽道家。

ミーティ

ギルバの眷属。クモ糸を自在に操る。冷静沈着な策士。

それを見抜いているランセリイが、緩慢な動きで焦らしてくる。

「う……う……、……こ、子供が、調子に乗らないで下さいよ……」

尾が、居並ぶ線を垂直になぞっていく。陰阜の膨らみに鉛筆の先ほどの先端が徐々に食い込んでいく。責め器具の穂先の沈んだ場所から透明な液体が滲み出した。その水気で卑猥な模様を描きながら、ランセリイの尾がミーティのスカートを持ち上げて踊る。

——カリッ！

「くっ！ あ、ふあうう……っ」

ミーティは思わず呻き声を上げてしまった。膨らんだ肉真珠が引つ搔かれたのだ。腰骨に、痺れに似た快感を伴って電撃が走る。一度大きく跳ねた腰が、刺激の余韻を味わうかのように断続的に小さく痙攣し、秘部を拙く覆う赤茶色のプリーツがオーロラの如く揺らめいた。

「結構効く？ こーいうの」

ランセリイが本格的な責めを開始し、尖った銚が上下に直線的な運動を取った。ストライプの大海の中央軸をなぞり、割り開いていく。時々左右に場所を変え、それが描き出すのは、ミーティの陰部を写した地図だ。ゾフィアに責められた所為で少し形を乱して小陰唇をはみ出させている慎ましやかな陰唇に、測量の円錐を突き刺して快樂の地震を起こす。

そうこうしていると、船底形に浮かび上がった肉華の大陸の先端に、奇妙な粒が現れた。シヨーツの生地、濡れて透き通った白い布に紅い色を浮かせている。

「ふ、ふうう……あ、そお、……く、そこ……やつ、やるなら、どうぞ……？」

「じゃ、お言葉に甘えましてー」

透明な眼鏡の裏側を上気させて被虐の予感に戦く少女と、上機嫌で尾っぽをくねらせる魔性の少女。黒い矢印が、地図上に発見された立体的な部位に接近した。形を確認し丹念に撫でる。鉛筆で紅い真珠を描き出す

かのような。盛り上がった朱色の肉真珠の側面を、クルクルと回る。ランセリイの尾の軟骨を思わせる微妙に痼つた細い刷毛^{はけ}で陰部を刺激されるミーティは、背筋の粟立つ快感に翻弄され、徐々に愛液の濃度を高くしながら悦楽にのたうち回った。

「う、くうううつ、あ、あ……つ、痛痒にも感じませんねつ、これぐらいじゃ……！」

そういう割りに眷属の腰は脅えたように上下左右に揺さぶられ、黒い鉛筆から逃れようとしては追いつかれてコリコリと辱めを受けている。

「ミーティちゃん、可愛いー♪ こおれは耐えられるかなあ？」

笑うランセリイがお尻の後ろで手を組んで尻尾だけを盛んに動かす。悪魔尻尾を銛のように振り上げ、粒真珠に突き刺してきた。

——ズキユウウツ！
「ひゃぎいいいいつ！ ふうつ、ふうつ、ふううううううつ！」

充血した神経の塊に真正面から尖った鋏が食い込む。獲物を真正面から捕らえたそれは、体液で脇に滑ることなく中央に沈み込み続けた。ミーティは腰を引き、臀部と後頭部を床に押しつけて弓なりに仰け反る。落雷を受けた浅ましい腰が上下に激しく揺さぶられる。一度弾みがつくと、なかなか動作を抑えられない。

「わたしの尻尾、先が尖っているからあまり腰を振ると怪我しちゃうかもよ？」

悪辣だった。ミーティに自分で腰の動きを調節させることで、まるで同意の下にことを行っているかのような錯覚を起こさせるのだ。それは取りも直さず、抵抗心の垣根を低くすることである。

「あ……あああ……くそ、ちくしよ……！」
布越しに肉芽に突き刺さった銛型の尾の先端が、軽快なテンポで上下に動き出す。ミーティはそれが深く刺さらないよう距離を取るために、腰を揺らす。決して快楽を求めている動きではないのに、次第にそれはランセリイの尾が仕掛けてくる淫らな揺さぶりで見事な

同調を見せてしまっていた。クンクン、と尻尾の鼻先で弱く突かれるクリトリスが生温い悦楽を垂れ流し、横腹や肩に汗を伝わらせる。微細なパルスを浴びるヴァギナが物欲しげに膣壁を蠢かせ始め、綻んでいく花弁からジユクジユクと愛液を垂れ流した。

(まずい……媚薬、媚薬を抜かないと……!)

腰のたった一箇所から生じる甘い快感が、下半身全体を疼かせ骨抜きにしていく。颯られきっていた魔薬漬のミーティには分の悪い耐久戦だ。焦りを覚えはするものの、とはいえ、肉体が自動でしていたことを、いきなり手動にできるものではなかった。

「ミーちゃんの弱い所、分かるよ。全部責めてあげる。その敏感なお肌を全部」

歌ったランセリイの影からさらに湧き出してきた赤黒い触手の軍勢が、過敏肌の暗殺者に一斉に襲い掛かってきた。全て、蜘蛛少女の四肢を拘束するものと同種のものだ。それはミーティの足元から流れ込み、プリーツスカートに頭を突き入れ、そこを通り抜けて臍

の上でのたくる。臍出しニットのひらひらした裾から内部に押し入った赤黒い軟体生物共は、シヨーツと御揃いのストラップブラに包まれた、ゴム球を半分に割ったような慎ましく艶めかしい胸の膨らみに巻きついた。ドロリとした粘液を肌に塗って下地を作ってから、触手が硬化した体表を武器にして全身を這いずり始める。

——ズチュズチュズチュ……過敏症の暗殺者は触手に責め立てられる。その華奢な胴体に巻きついた者の体表の丸い角が、潤滑油の効果で滑っていく度に、甘い痺れが彼女の皮膚の毛穴を開かせる。

「う、ううううううつ、うあつ、はあ、はあうつ、ひ、うううううううつっ!」

卑猥な粘液で肌をコーティングされたミーティ。桜色に上気していた白く滑らかな瑳玉の肌が、醜い触手共の塗り込める快楽によってさらに真っ赤に染まっていく。仰け反っている内に頭の方に身体がずれていく彼女を、何度も触手が引き戻した。床と擦れたプリー

ツスカートが今にもずれてしまいうた。

肌直接塗り込まれる愉悅が、少女の肢体を真つ赤に茹で上げていく。首に巻きついた触手たちが震える顎と耳の後ろを撫でてくる。深い悦を感じて口の端から垂れた涎が、耳に達するのが分かった。触手の先端がそれを掬って伸ばしながら塗ってくる。触手に集われる蜘蛛少女の眩い肌には、古城の壁面に巻きつく蕨の如く赤黒い彩りが成され、彼女の全身を隈なく卑猥な動きで磨いてくる。

「く……くうんっ、うあ……うはああっ……つく、くくっ、どうしたの？ 仮にもギルバ様の眷属が、この程度の触手……っで、どうにかなる訳ないでしょう」
喉が詰まるほど快楽に翻弄されつつも嘲笑うミーティ。触手たちに尻尾の居場所を譲ったランセリイが枕元に移動して、頭を覗き込んできた。逆さの顔が小悪魔的に微笑んでいる。

「ふーんだ、墮ちる人は皆そう言うんだよーっだ」
触手が一本ショーツに触れてくる。ひくひく震える

赤貝の輪郭をなぞる。それは下着の布の端に頭を入れ、強引に捲り上げると、ぱっくりとした赤貝に一直線に突き入ってきた。

——ズグウツ、ズル、ズルウウウ……！

「ひやおっ！ あ、あうう、くっ……、くおおおおお
おおおおっっ」

頭を左右に振り、丸い後頭部をごろごろとさせるミーティ。彼女の締めつけのきつい肉洞を、岩盤を崩して坑道を掘るかのように、触手が押し進む。なかなか奥に進めない赤黒い肉塊は先端を激しく上下左右に振り、突いても崩しても土砂の戻ってくる潤んだ肉洞の粘膜を執拗に拡張せんとする。その際に土煙の如く舞い上がる黒い痺れが、蜘蛛少女を腰砕けにしていた。
「ああああ……はああ……！」
一本では足りないと思つたのだろう。さらに二本の触手が入ってきた。

「うあは、あああああああああああああああああっ！」
ミーティは身も世もない鳴き声を上げた。触手が膣



くねらせるミーティが訝る間もなく、それは再び元の場所に這わされる。そして――。

――ズヌリ。ミーティは目を見張った。肋骨辺りに押し込まれた筈のランセリイの指が、何の抵抗もなく蜘蛛少女の肌に沈み込んだのだ。血は流れず、痛みもない。呑み込まれていく指先は、ミーティの胸が白い粘土でできているかのように指の周囲に肉の盛り上がりを作り、孔を空けていく。ただただ、熱された棒が埋まっていくような感覚があった。

ルーズな臍出しニットを捲り上げられて露出した乳白色のガラス細工の如き色合いのミーティの胸は、発展途上のまま静止した未成熟な膨らみに桃と白の横縞の胸当てを巻きつけている。数本の触手にきつく縛められているそこは、情欲を抑えきれず、悩ましげに煩悶していた。止めとばかりに、疼痛の塊のようなランセリイの指が、ずぶずぶと沈んでいく。まるで心臓のすぐ隣に赤熱した石を埋め込まれているかのようにだった。痛いほど尖っていた乳頭が痲り立ち、破らんばか

りに鋭角的にブラジャーを押し上げる。触手に拘束され肌を食られるミーティは、黙って歯を食い縛り、涎を垂れ流すより他ない。

「あう……あう……はぐううつ……あ……あつ……、はあぐうううう……！」

奇妙な現象によってミーティの内部に押し入った魔少女の指は、恒星の如き熱量を持つ未知の性感帯となつて蜘蛛少女の脳を蕩けさせた。

第二関節まで沈んだ所で、指が引き抜かれる。ストライプのブラジャーの下に痕として残ったのは、タールのような重たい液体を湛えて垂れ流す、黒い孔であった。そこが孕む大量の熱がミーティを苛んでくる。性感帯を一つ増やされたような不吉な予感がした。

「ほうら、こんなに闇色の蜜」

熱い息を吐くミーティにランセリイが抜いた薬指を見せてくる。その先端にも黒い粘体が纏わりつき、ドロリと垂れていた。甘ったるい腐臭を放つそれを魔少女がペロリと舐める。

「これが私の能力。こうやって対象の負の感情を啜ることが出来るの」

言うや否や、ランセリイがミーティの胸に空けられた黒い孔に口をつけてきた。

——ペチャペチャ。

「……………あ……………っ！」

僅かに肉の盛り上がった孔の縁を、ランセリイの肉舌が這う。その瞬間ミーティの全身を駆け巡ったのは、どす黒い快感だった。

(な、何だこれは……………!?)

焼けるように疼く昏い孔の周囲から、小さな蟲に這い回られるような痛痒感がする。

ジジジ……………ジチジチジチ……………。

消える寸前の電球のような、屈強な顎を持つ昆虫が肉を食むかのような、生理的嫌悪を催す音が体内で響き、おぞましい物に触れられるからこそ感じてしまう恍惚が湧き上がる。最初黒い孔の付近でしか感じなかった疼きは、たちどころに分裂、増殖し、その現象は

あつという間に全身に波及した。

四肢の爪と皮膚の間にすら小蟲の蠢く疼痛が満ち、体表を這いずる触手と連動を見せた。脇腹が毛虫の毛らしき物で肌の裏から擦られ、妖しい刺激と痛痒感に襲われれば、赤黒く粘液に塗れた触手が、すかさず表面に硬化した体表を押しつけ責めてくる。

「ひ、ひあうっ！ はあ……………はあ……………あ……………っ！ ああああああああつっ！」

赤黒い軟体生物と官能の蟲の大群に、紅潮した白皮の表と裏から快美な侵蝕を受けた蜘蛛少女は、地下の密閉空間の中で喘ぐ。全身の毛穴を開いて甘く生温かい官能の汗を流し、過敏な肌に蔦の如く絡みついた触手によってヌラヌラした粘液を肌塗りに塗りたくられる。岩のように、ごつつ、とした体表が肌を滑らかに滑る度に、プリーツスカートを振り立て、ルーズニットのひらひらした裾を揺らし、押えきれぬ嬌声を迸らせた。「く、ううう……………ちよ、ちよつと、この責め、飽き……………っひゃん、ふあ、あああうん……………飽きたんですけど

ね……。君、いつ、いぎいい！ 触手にバリエーションなさすぎ……。ひんっう、くああああ……。！」

蟲の數匹にクリトリスを裏から噛みつかれた気がしたミーティは軽口を途切れさせて、捲られているストライプショーツに愛液を流し出した。硬体とのローションプレイとセックスで蹴られて、脂肪的な丸みとポリウムを増しつつある尻や太腿で、内側から蟲の大群に蠢かれて吼え声を上げる。

「あ、シエリス相手に勝ち星がないのが悔しいんだ」
シャギーカットを痙攣させていたミーティは、言い当てられてドキッとした。獲物の心に溜まっている澱を吸い出し、負の心を味わっているランセリイが顔を上げる。

「自分は殺すしか能がないと思ってる。メデューナみたいに特異な能力もないし、いつギルバに捨てられるか分からないってね」

動揺を見せたミーティの心の間隙を突くように、皮膚の裏で性感帯を刺激してくる蟲の大群がヴァギナに

集った。三本の触手に絡みつく腔粘膜に向けて一斉に節足を踏み鳴らし、官能の大激震を起こす。ギユッと凝縮した女洞の壁に締め上げられて、陵辱に励んでいた女泣かせの軟体生物が激しく震えた。ランセリイがズツと音を立てて黒い蜜を吸うと、頭にズンと響く衝撃が走る。残酷で無邪気に笑う魔少女が、孔の内部に突き入れた指先を鉤型に曲げると、クリトリスを弾かれるのに匹敵する快感の小爆発が起きた。

「ひ、ひいああああああああつっ！ な、何を言っている、ランセリイ・K・シエリスエルネス！」

「へえ、可愛いところあるね」
孔を吸り、黒い蜜を味わっていたランセリイがニタリと笑った。

「ついつい冷淡な態度でご主人様の気を引いちゃうんだ。まるで仔犬みたい」
「——っ！」

心を覗かれたミーティの頬が屈辱で引き攣り、赤く染まった。

「……君、喋りすぎ……！ うひゃう……つ……くふあああおおおお……」

拘束され手首をビクとも動かせないミーティは、ただ陵辱されるままにヴァギナを突き上げられ、大小纏めて花開いた陰唇を腫れぼったく充血させながら、拳を固く握り締めた。薄く引かれた眉をぎゅつと寄せ、綺麗に並んだ歯を軋ませる。

「ほら、ミーちゃんの心の膿の味」

にやりと笑んだランセリイが苦くて甘い口付けをししてきた。

「どうしてそんなにギルバに忠誠心があるのかな。ミーちゃんって、もしかしてギルバのこと……いやーん、この触手をギルバのだと思えば、って言ったたら、燃えちゃう？」

——そんなんじゃないっ。

自分の忠義を侮辱された気がしてミーティは憤った。彼女が腐泥の王に付き従うのは、恋心——もしかして、こちらの美意識を冒瀆する新手の言葉責めだったのだ

ろうか——などではなく、あの他者との協調性皆無の魔神がこの偽善に満ちた腐った世界を正し、大乱を起こして破壊してくれると信じたからこそだ。それに、目の前の魔少女には分かるまい、ザーバッハとの戦いで散った幾万の同胞の無念は。

「格好いい、ミーちゃん、鎮魂のために戦ってるんだ！」

その思いは全て相手に筒抜けのようで、黒い孔を薬指で抉りながらランセリイが笑う。

——言わせるな、こんなこと。

だが、快楽に濁った頭は自制が利かない。斜に構えていつも集団の輪の縁のぎりぎりにいる少女は、膺の突き上げに翻弄されて、普段なら絶対に口にすることのない本心を絶叫していた。

「ああ、戦ってやるさ！ どいつもこいつも、残らずあいつらと同じ場所に送ってあげますよ！」

頭の芯が痺れていく。それは決して不快なものではなく、心の内に秘めているものを吐き出す時の、背徳

的で甘美な退廃感だった。

「あ、メデューナのこと少し嫌いでしょ、いつもふざけてて、そのくせ有能で。わたしのものになるなら、あいつに勝てるだけの力を与えてあげようか？」

ともすれば魂を呪縛されそうな魔少女の甘言。ミーティは頭を振り乱して、術中から逃れんとする。

「はああああ……はああああああ……ああああああああ……き、貴様……ランセリイ！ ボクの心を覗くなああああああああ！」

「だってミーティちゃんのこと一杯知りたいんだもん。教えてよ、ギルバの居場所も、心に秘めた情熱も、身悶える時の貌も何もかも！」

悪びれずに笑ったランセリイが、ミーティの臍の上に跨り直した。

「そういえば、胸を揉んで大きくしてあげる約束してたっけ？」

ニットに裾から手を入れてストライプのブラジャーをずらしてくる。

露わになったのは、熟して落ちることを永遠に否定した青い果実だ。切れ長の目に意地悪い輝きを見せた魔少女が、そこに苛烈な攻撃を開始した。淫熱と官能の蟲で二重に嬲られて汗ばみ張った小振りな丘を、無邪気な子供の土遊びの如く徹底的に弄くり回す。白い肉を掌で押し崩し、硬くなった乳首を親指で転がす。女の味を教え込まれた肉丘は、鬼灯の如く橙赤色に熟し、湯気を立てる。黒い孔から蜜が垂れ流れた。

ミーティの胸のニットの蜘蛛模様は、ランセリイが下に手を潜り込ませて乳房を揉んでいる所為で、実物の蜘蛛が眷属の少女の胸部に乗っかり乳房を苛んでいるようにも見えた。

「い、きひつ、ち、乳首、破裂するっ、も、もう弄くるな、馬鹿あああああつっ！」

ブラを外されて露出した乳首を爪弾き、演奏家となったランセリイが、弓なりに反ったミーティの胴を琴に見立てて弾奏をする。ニットの背中が床と擦れて毛羽立つほど暴れる蜘蛛少女の耳の中にも触手が入り込

め……ろ……おっ！」

悪魔尻尾がクリトリスに愛液を塗りつけ、丹念に撫で回す。かと思えば、勢いよく急所の真芯を突いてくる。ランセリイが両掌にミーティの愛液を塗りつけ、丘陵を揉んできた。いまだジンジンと疼く膣内の蛇の噛み痕に、触手の硬い部分がぐりぐりと触れてくる。蚊の刺し痕と同じくぷっくり赤く腫れた場所を擦過されると、途端ヴァギナが溶けるように熱くなり女の蜜が溢れ出した。堪えが利かなくなつた肉壺をグチャグチャと掻き回されれば呂律が回らない。

「そ、そこ、やめらのおおとおお、れえ、らめろお おおおっっ！」

「あはは、ミーちゃんの身体って弱点だらけ！ ほら、ここは？ ここはどう！」

颯られる眷属のシャギーカットが汗で萎れ、頬にペたりと貼りつく。蜘蛛少女の小さな口は開きっぱなしになり、嬌声と空気を交換し続けるようになる。

（嫌だ……嫌だ……！ こんな奴に好きにされるのは

……！）

暴虐に加えて膣で激しい突き上げを見舞われるミーティは、自分の腹部に跨るランセリイを振り落とそうと身を振って暴れた。プリーツスカートの襜や、ニットの裾がバタバタと舞うが、しかし戦果はない。臍に触れた黒髪白角の魔少女の陰阜の膨らみの感触にドキリとさせられた拳句、逆に自分の眼鏡の蔓が耳から外れてしまう。プリーツスカートもずれきり、汗を弾くほどさらさらだつたミーティの茶色い髪は、今はもう見るも無惨に濡れている。

「く、クソ、お前なんか跳ばされてたまるかああつ、あ、はあぐううう……っ！」

熱い涙を滂沱ぼうたと流し、ミーティは数度しやくりあげるように嘶いた。

「嫌なんだ……嫌なんだよ……止まれ、止まれ、ボクの身体ああああ——！ ひっ！ 動くなああつ、くふあ……や、だめ、も、ほんとに、も……うっ！」

同時にミーティの身体は彼女の統制を離れ、肌を擦

——墮トセ、墮トセツ、暴ケ、暴ケ、暴ケツツ！

——シエリスエルネス、ヲ蹂躪シロ！

笑いすぎて涙目のヴエゾフィアンカが、肩を震わせつつ指で目尻の雫を拭つた。己より大柄な魔物たちの剣呑な視線を意に介さず、真っ直ぐに魔姫を見てくる。「お姫様の再奪取！ さあて、お馬鹿さんたちのお陰で助かつちやつたわ。次は、そいつらから二十回ずつ精液を搾り出してみてくれないかしら。そうしたら、もう一回ランセリイを解放してあげる」

——ふざけるな！ お嬢様を貴様の言いなりになどつ、させるものかつ！ お嬢様は、我々が、この手でお守りするのだつ！

主君の止める間もなく、魔物たちがヴエゾフィアンカに襲い掛かった。先頭に立つのは黒曜石の如き色合の肌を持つ、アーメットと一体化した頭部を持つ筋骨隆々とした魔物だ。彼の携える刃の鋼と鎧が、鈍く光を反射する。他にも継ぎ接ぎだらけの肉体のハンマーを持った怪物や、山羊の頭部と鋭利な爪を持つ魔物

が総勢五体、体格だけで言えば遙かに劣っている女に迫る。ゾフィアがフンと鼻で笑つた。

——ギイイイイイイイイッ！

連携の拙い彼らの一斉攻撃は、ゾフィアの双頭の大鎌のたつた一薙ぎで払い散らされてしまった。享樂と猛毒の淑女が一瞬で不揃いな攻撃の軌道を見極め、長柄で一つ描いた円弧に全てを収めてしまったのだ。

「馬鹿にしないで頂戴ねえ？ お嬢様は愚鈍ではないの。そいつがお前たちを頼りにしないなら、それは正しいの。百匹束になられても、私は倒されないわ！」

（——今しかない！）

大鎌の描ける軌跡がランセリイの首から外れているのを見たシエリスは、隙を捉えて、爪を伸ばして揃えた。爪に青白い靈気が満ちていく。

今更ながらに実力差に気づいて後退する大柄な魔物たちの横を駆け抜けて、ゾフィアに襲い掛かる。自分がされた不意打ちの逆返しだ。だが。

——墮チロ、墮チロ、雌犬ッ！

斬魂の爪が享楽と猛毒の淑女に届く寸前、小さな風切り音と共に飛来したカードが、その軌道に割り入って盾になった。カードに食い込もうとした魔爪がブスブスと音を立てて焼け落ちていく。

「これでも対魔王用の兵装だもの。お前の玩具が通用すると思わないことね」

絵柄は、鏡に映った己に剣を突き刺して絶命している戦士——ストレングスのカードだ。

「そして呪具だから、迂闊に触れると酷い目に遭う」力が逆流してくる。吹き飛ばされて、床に倒れて呻くシェリスを楽しそうに見ながら、ゾフィアがランセリーの首を掴んだ。

「お前、心を覗く力、少し借りるわよ」

ランセリーの周囲から噴出した黒い霧が、渦を巻いて十体の左胸に吸い込まれていった。途端、煩悶し始めた魔物らが左胸に空いた穴を押さえ、喉の奥で唸り声を上げて蹲る。彼らの瞳に、愚鈍な弱者の仮面に隠れていた獣性が灯るのを見たシェリスは緊張を高めた。

——じり。魔姫が敵からも男からも距離を取ろうとする。上半身剥き出しの魔物がドロドロと黒い蜜を垂れ流すのを見て、ゾフィアが笑った。

「それがお前たちがシェリスに抱いていた劣情の具現よ。さあ、心の膿を存分に吐き出させてあげろ」

崩れた壁を飛び越えた青紫色の淑女が、未だ呪法具に受けたダメージで足元のふらつく魔姫に襲い掛かってきた。触手蠢く床に押し倒されたシェリスは紫髪を広げる。背中におぞましくのたくる触手の感触がする。身を震わせた少女は、のしかかる女に胸を掴まれ、さらに大きく喉を反らした。強く握り締められた乳房の先端から、白く豊潤なミルクが滲み出る。

「うっ、くううっ！」

脳が痺れるような疼きを豊乳から感じる。陵辱の傷痕だらけの魔姫を捕らえて、享楽と猛毒の淑女が嘲笑う。

「真面目に我慢しちゃって、馬鹿みたいだったわよ、シェリスウ？ まだ足りないでしょう、もっとよ、も

つとお前を狂わせてあげる！」

「も、もうお断りですわ、貴方を倒してランセリイを取り返させて貰いますわよ！」

強気に叫ぶシェリスに、ゾフィアが顔をぐいと近づけてきて、狂気に満ちた目を見開いた。

「ノンノン、だーめよ。ずっと私のゲームに付き合うの。ゲームセットはもちろんお前が墮ちる時！」

暴れる黒と赤のゴシックドレスに床でのたくる触手が再び絡みついてきた。ロングスカートの潜り込み、粘液に塗れた素の脚線を擦って黄ばんだ泡を立てながら、足首から太腿へ螺旋の昇り階段を作る。禍々しい衣裳の華の蕾の如く膨らまされた肩を押し潰し、たすきをかけるようにして胴体にも巻きついてくる。

（く、幾らなんでも、もう一度責められるのは……！）

拘束されつつある魔姫は抗うが、女に爪を立てるよりも早く、瞳を細めて嘲るゾフィアの蛇の尻尾を股間の入り口に擦りつけられた。

「ひ、ひうっ！」

緑鱗が濡れそぼったラビアや、充血したままの熱い

クリトリスの上を這いずり、鱗の間の段差で刺激してくる。ヒクンと仰け反った黒衣の少女の肩を、艶めかしくぬめる白い肌を持った女が上から押さえた。

壁際の無力な少女が指差される。

「さあてシェリス。お前は私がいちいち脅さないと分らない愚鈍ではないわよねえ？ いい子に聞き分けなさい。あの娘をお前の家臣に殺させたって——」

——ビュッ！

その時鋭い音がして、ゾフィアの頬が裂け一筋の血が流れた。青紫色の淑女が伝った血をペロリと舐める。

「はは……わたしもゲームに交えてよ……」

蒼眼を見開いたランセリイが、妖気を振り絞って攻撃を放っていた。

「駄目よ、お前はまだ。そこで見ていなさい、愛しいシェリスが墮ちていく様をね！」

嗜虐的に嘲笑った淑女が凄まじい力でシェリスの首を掴み上げ、強引に姿勢を変えさせてきた。ランセ

の罵声を尻目に、起こした魔姫をぺたんとへたり込ませ、自分はその後ろに密着して膝を崩して座る。左手で少女の左胸を摩り、右手で腰の輪郭をなぞってくる。

「見なさいお前たち、憧れのお嬢様の艶姿よー？」

くすくすと嘲りと悪意に満ちた笑みを浮かべるゾフィアが、シエリスのスカートを捲し上げた。仄暗いランプの明かりの下に晒されたのは卑猥で凄惨な有様だった。健康的で眩しかった脚線は黄色い粘液を塗りたくられ、おぞましい甲殻生物に締め上げられて、その白い肉を哀れに悶えさせている。一瞬魅入られたように視線を食い入らせた男たちが、慌てて目を背けた。魔姫の股座が視線と羞恥に炙られてカッと燃え上がる。「さあ、お姫様を見ていて充血した、お前たちの粗末なものを取り出すのよ」

——だ、誰が貴様の言いなりになど……っ。

命令を拒否されても特に気を悪くした風でもなく、ゾフィアは再度命じた。大鎌を魔姫の首筋に近づける。「そこのお前、こいつの前に立つぐらいはできるでし

よう。でないと、このまま主を殺してしまおうよ」

享楽と猛毒の淑女が目をつけたのは、真っ先に彼女に切りかかろうとした黒曜石色の肌を持つ魔物だ。彼は暫し逡巡した後、根元から折られた剣を鞘に収めて柄をベルトで固定すると、悔しそうにしながらシエリスの前に立った。薄く笑ったゾフィアが片手で鎧の下半身を掴む。そのままガリガリと、あつという間にその部位を砕いてしまった。鎌首を持ち上げた触手が金属の残骸を隅に運んでいく。

「うふふ、口ではなんとと言っても雄よねー？」

長方形の布を二枚、紐で結びつけただけの、下着と呼ぶには簡素にすぎる腰布が露わになった。股間を覆う矩形くわいけいの布の中心は、内側から何か硬いもので押し上げられている。魔姫に忠誠を誓う臣下が抱えていた主への欲情の証。シエリスの頬が紅く染まり、ヴェゾフィアンの口元が嘲笑に吊り上がった。

それから、ゾフィアはシエリスに囁いた。

「ねえ、お願い。聞き分けのないあいづらに代わって、

ゲームを進行させてくれないかしら。大事なランセリイのためだもの、やってくれるわよね……?」

女が右手を伸ばし、大鎌の先端をびたりと魔少女に向ける。同時に周囲の触手が鎌首を擡げ脅迫に加わる。

「……分かりましたわ……分かりましたわよっ!」

元より魔姫に選択肢はなかった。手で薄汚い腰布を摘もうとしたら、手首にゾフィアの蛇尾が絡みついて牙を剥いてくる。只でさえいらついている彼女は、横顔を接してくる女を睨んだ。

「駄目よ、シエリス。お前は家畜なんだから」

意味深に笑んだ淑女が耳の後ろを舐めてくる。

(くっ……、調子に乗って!)

それで意味の通じてしまう自分が嫌だ。羞恥と屈辱を感じながら、やむなくシエリスは男の股間に顔を近づけた。長年使い込まれているらしく、矩形の布の織維はやや擦り切れ、正体を知りたくない染みが無視できない量あった。おそらく彼らは、魔界を出発してからこれまで休息を取らない強行軍だったのだろう。当

然、風呂に類する肉体の洗浄も疎かで、濃い体臭が練られている。鼻先に肉棒の胎動を感じて、魔姫の息が止められた。雄の匂いなど、もう嗅ぎたくなかった。

(こ、これに唇をつけますの……?)

仕方がないのだ。嫌悪感を堪えて魔姫は唇で布の端を摘む。圧迫されて染み出した湿りに口元を汚されながら、ペニスの覆いを取り除けた。むわりと雄香が漂った。露わになった黒曜石色の肉棒はいきり立ち、大きく鰓が張っている。今にも千切れてしまいそうなほど張り詰めた裏筋が、ずっしりした陰囊に繋がっていた。

(こんなの入らない……)

網膜に映る魔姫の顎から額まではある巨塔に、シエリスは圧倒された。そして、反射的に肉棒が己の器具に入るか入らないかを考えてしまったことを恥じる。

——ぐ……お嬢様……

屈辱に震える男。それ以上の行為に躊躇いを見せるシエリスの目の端に、ゾフィアがキスをした。

「あら、メデューナと肌は重ねられても、男の物に触れるのは恥ずかしい？ 中途半端な成長ぶりねえ。ならお手本を見せてやろうかしら」

瞳の上端を水平にして病んだ目つきをしたゾフィアが、主君の姦視で嬲られる男根に舌を触れさせた。黒曜石の如き艶のある胴に紫色の唇が触れる。屹立する肉棒がピクンと痙攣し、狼狽した男が腰を引かせる。

「お嬢様の恥態を見て興奮しちゃったのよねーえ？」

シエリスの肩の後ろから身を乗り出した女が、躊躇なく口を開いて男根を啜えた。喉まで呑み込んだ所で、さらにやや長めの舌を突き出して、竿に巻きつける。頭を振ってダイナミックなストロークを開始した。

まさに目と鼻の先で行われる饗宴を見るシエリスの頬が熱を持つ。男の硬度と角度が増していく。魔姫の胸と股間に添えられた淑女の指がからかうように蠢いた。ちらちらと少女はランセの方を気にするのだが、大鎌を握った敵の右手はピクリとも動かなかった。

「敵の女に責められる気分は如何かしら、お前」

左手で陰囊を上下に揺さぶり射精を促す。女の掌上で袋が転がされる。肉棒を口から抜き取ったゾフィアが男根の根元に軽く噛みついた。びくびくと、まないた 俎板に上げられた魚の如く肉棒が脈打つ。亀頭の先端の鈴口から透明な先走りの汁が流れ、女の唾と混じってテカテカと輝いていた。

「あら、意外と頑張るわね？」

射精を堪えた黒曜石の魔に、ゾフィアがゾクリとする妖艶な笑みを投げかける。硬化しきった強情な男根の裏筋を、最後に根元からカリ首まで一度舐め上げると、講師は責めを中断した。

「さ、私のレクチャーはこれでおしまい。次はお前の番よ、シエリスエルネス」

白い指が絡みつく。睾丸に触れる気になれなかったので、魔姫は一番形の整っている竿に触れることにした。両手の指先を恐る恐る竿に添えた彼女は、ゾフィアがしていたように裏筋を舐め始めた。そこを舐めながら、竿の反対側に丸めた掌を添え、指の腹で上下に

摩る。できれば亀頭にも陰囊にも触れなくなかったのだ。タバコに火をつけるような仕草をするシエリスは、女の唾液の上から己の舌を押しつけた。腰の引けた挟撃ではあったが、肉棒はしかし敏感に反応した。

——お、おやめ下さい、お嬢様！ この、ようない

心の中で彼に謝りながら、魔姫は裏筋をちろちろと舐め上げる。猫がミルクを舐めるようにチロチロと鼻息がそよぐだけでも肉棒はビクビクンと痙攣した。

頭を上下させるシエリスの前髪が、亀頭の粘膜に少し触れる度に男が呻き、本当は苦しんでいるのではないかと思うほど、ペニスがのたうつ。

奇妙な時間だった。本来ならシエリスの味方である彼や彼らは、自分で自慰でもして——ゾフィアはシエリスの手で搾り取れと言ったし、許しそうもないので命じないが——さっさと二十回射精しているべきである。しかし羞恥や矜持といったものが邪魔をして、そういう行爲を阻んでいるのであった。

「あ、貴方、つまらない意地を張らないで早く出して

おしまいなさい」

——……そ、……そんなつ、お願いです、どうか、先を、おうつ……き、亀頭を……！

どうやらシエリスの仕草は、とんだ生殺しになってしまっていたらしい。音を上げた黒曜石の魔の懇願を聞いて、羞恥で奉仕に供される手の動きが止まった。

(なんですつて?)

耳元にヴエゾフィアンカが囁いてくる。

「先端の唇を窄めたように膨らんだ場所を、指の腹で抉ってあげるの。ランセリイを助けたいでしょう？」

最後の殺し文句だ。観念した魔姫は竿以外の凹凸の激しい部位にも手を伸ばす。右手で彼の陰囊を掬い上げ、左掌で亀頭を包んで人差し指で鈴口をクリクリと刺激した。

——ニチャ。人差し指に、接着剤並みに粘ついたカウパー氏腺液がこびりつく。

——う、う……くお、ぐおおおおおおつっ！

男の鰓が、指を呑み込まれるのではないかと不安を

覚えるほどに、ぱくぱくと息継ぎをした。先端から栓が緩んだように大量の先走り汁が流れ出す。

シエリスの両掌は、肉棒全体に垂れていくカウパー接着剤によって、男の竿に貼りつけられてしまっていた。溶けたキャンドルの様相を呈するペニスに両掌を擦りつけて扱き、時折、白いグローブを嵌めたようになってしまっている掌を先端や根元に塗りつける。手首をドロリとした液体が垂れていった。

舌にも唇にも粘着体が糸を引き、奉仕状態から外すことができなかつた。少女の舌に舐められて綺麗になつたそばから竿に新たな濃い卑粘液が垂れ落ちてくる。で、拭い取られた物はどこに行つたかと言えば……。

（飲んでる……私こんなものを飲んでる……）

舌の根元に溜まつた液体を、時折シエリスの喉が嚙下していた。吐き出す暇がないのだ。肉棒が噎せ返る雄の匂いを放つて絶え間ないフェラチオの催促をし、背後のゾフィアは後頭部を押し込んできて、唇を離す余裕を奪ってくるのだ。

——コクン……コクン……。

気の遠くなるような時間をかけて巡ってくる数限られた息継ぎの際にどうしても、口腔に溜まつた唾液で薄められた先走り汁を喉に送ってしまう。味覚、嗅覚、触覚。何もかもが今の魔姫には辛かつた。

（大きい……これ、大きい……）

触手責めをされたばかりだからだろう、脳裏に明瞭に、このイチモツで鬨られ抜く自分の姿と、その歓喜が描かれてしまう。陵辱の煩悶がぶり返してきた魔姫は自分の頭が、肉棒の熱が移つたかのように、ぼううとしていくのを感じていた。ゾフィアが胸と股間を責めてくる。わざわざ乱れたショーツを綺麗に直し、その上から白い手袋を蠢かしてきた。簡単に拒絶されないように、ゆつくりと快感をすり込んでくるのだ。

「早く終わらせないと、私がお前を落としてしまうわ？」

「う……むううう……つく……」

男の股間に顔を埋め、享楽と猛毒の淑女の愛撫を受

け、ふるふると紅いリボンを揺らし悶える高貴な魔姫。雄共はその淫靡な光景に魅入られているようだった。

「ほうら唇を目一杯に開いて、横から啞えて竿を抜く
のよ。そして——」

ゾフィアが耳に奉仕の方法を事細かに流し込んでくる。シエリスは左手の余った白い指をカリ首に巻きつけ、締めつけながら思いきり上に擦った。

——うぐつ、ぐ……ウゲオオオオオ……ッ！

黒曜石の魔が思わず頭を掴んできた。相手の興奮具合が感染して頬を真っ赤に染めたシエリスは、鈴口を指の腹で挟み、熱心に尺八を続け、上下に揺さぶりながら睾丸を揉み込んだ。魔姫に嬲られる雄のシンボル全体が石鹼を塗したかの如く泡立ち、男の腰が痙攣し、肉棒がギチギチに張り詰めていく。

——あ、掌の中で太く膨らんでいく——嫌っ！

崩壊の予兆を感じ取った魔姫が身を縮こまらせた瞬間、白濁流が彼女の人差し指を弾いた。

——ジュバァァァッ！

織手に包まれていた肉棒が破裂した。射精を抑えようと思わず握り締めた男根の胴が膨れ上がる。肉棒が脈動を繰り返し、白い塊を繰り返し断続的に発射する。噴火という形容が相応しかろう。重量感のある漆黒の逞しい竿が胴の直径の収縮を繰り返し、脈打ちで下に揺れ動きながら睾丸から迫り上がった熱い精液を鈴口から進らせた。放たれた白濁が魔姫の頭頂から降り注ぎ、半ば固形物と化した塊が旋毛に落ちる。周囲で身じろぎもせずこの光景に目を奪われる者たちが、咎めるような妬むような視線を放出者に向けた。

(こ、これの中で出されたら)

魔姫は呆然と目の前の暴発を見つめていた。肉棒の脈打ちや腹筋の伸縮を見ていると、心臓が熱くなる。シエリスの顔が上気していた。子宮が疼き、くすりと笑ったゾフィアが、ショーツに指を突き込んでくる。

「物欲しそうね？」

ネチっこい指がショーツで蠢く。身をくねらせる魔姫を見て、眼前の男の硬度がさらに増していった。

「はい、まずは一回。次は啞えてあげなさい」

——お、お嬢様、申し訳ございません……！

「な、何が申し……うむ……っ」

一度の射精では昂ぶりの収まらなかつた黒曜石の魔の肉棒が口腔に押し入れられた。魔姫の頬が真っ赤に染まる。味覚が刺激された途端、身震いがした。背中に広がった髪が波打つほど大きく。肉棒を扱く舌を離そうと思うのに、それはまるで吸いつくかのようにペニスを包み込んで、独自の卑猥な動きを続けていた。

（ち、違う、私、欲しがってなんか……！）

抗おうとする魔姫だが、目の端にいよいよ苦しそうな娘の姿を認めて、奉仕に勤しまざるを得なくなった。

「一本ずつじゃ終わりやしないわ。両手も使うのよ」

シエリスは両手を広げさせられ、掌で一本ずつ肉棒の相手をさせられた。両掌に、自分が啞えているのは別の肉塊が乗せられてきた。右手の物はカリ首付近が太くなっている。左手の物は、誰の物なのか、竿にうつつらと毛が生えていた。どちらも蒸されたように

熱く湿っている。頭がカーッと熱くなった。持ち主の姿を求めて視線が脇に逸れようとするのを、シエリスは目を固く瞑ることで防いだ。

「どうしたのシエリスエルネス、辛そうだけど。今度のは相手を責めるだけなのだから、さっきのよりずっと楽な筈よねえ？」

ゾフィアが耳の穴にそっと息を流し込んできた。その指は相変わらず蠢き、シエリスの身体から触手責めの興奮を忘れ去らせない。悶える腰を巻きついた触手がしっかりと固定し、女の指がショーツに沈み込む。

「肉はたっぷり虐めたから、次は心を苛んであげる」

愉悅に満ちたゾフィアの顔を尻目に、横目で見るランセリイは、治療で肉体の崩壊は免れたものの、体力を消耗しきって喋ることすらままならないようだ。無言で俯き、長めの前髪の奥から怒りとも慙愧ともつかぬ視線を玩弄される魔姫に向けている。首や両腕を必死に動かしシエリスは祈った。

（は、早く終わらせるから耐えて、ランセリイ……）



「そう、上手いわ。口は舌を螺旋状に絡みつけなさい。手は指をこうやって折り曲げるの」

コーチを気取るゾフィアが、実演をしてみせる指で魔姫の胸を掴み、秘部に指を突き入れた。

「ふむううっ、んっ、むう！」

シエリスの尻尾が抗議で持ち上がるが、反抗しようとしたそれを淑女の蛇の尻尾が呑み込んでしまう。

「ほら、早く抜け出さないと消化しちゃうわよおー」
霞のかかり始める頭で、魔姫は要求通りに動き始めた。

「どうしたの、お前。少し空腰を使ってるじゃない？」

「ひ、ちがふ……指が……あるからっ」

遊戯に弄ばれる少女の黒衣から零れる紅潮した太腿が石床を滑り、ゾフィアの二本指から逃げようとした。断じて身体が男を求め始めているのではないと。だが潤んだ蒼眼の奥では、自分の奉仕する三本のペニスに刺激された情欲がむくむくと頭を擡げていた。

男の腰振りの過程で顔を上向きにさせられたシエリ

スの視界の端に、残りの配下の姿が捉えられた。如何に愚鈍な彼らとて魔姫の身に起きた変貌は感じ取れよう。淫靡に変わり果てた主君の姿を見て言葉を失っている。それと同時に、高嶺の花が手の触れる距離で貶められていることに興奮を覚えてもいるようだ。

必死に首と手首を振るシエリスと、壁で俯くランセリイを見比べたゾフィアが、悪意をもって笑む。

「頑張り屋さんねえ、シエリス。そんなに雄の精液が欲しいのかしら」

顎を擦られ尋ねられる魔姫に拒否権はない。

——コクン。

「お前たち、何を突っ立っているのかしら。これはゲーム、出すことがお嬢様のお役に立つことなのよ？ シエリスだって求めているんだから。ねえ……？」

屈辱的な首肯と共に、残りの七人に自慰をして射精態勢に入るように指示が下った。鈴生りに肉棒が屹立する。魔姫へ向けて傾けられたそれは、樹木の枝々から眼下の獲物を付け狙う大蛇の集団を思わせた。

内肉が盛り上がり、捲れ上がった陰唇から、溶石の如く愛液が流れた。掲げられた脚が震え、紅い靴が脱げそうになっている。尿道が熱くなり、漏れそうだ。

おねだりの声が小さいと柳を絞られる。それは緩められることなく、魔姫は積み重なった微罪によって、乳房を球形に変えられている。突き入れられた拍子に乳首が壁と擦れて、性感が爆発した。

「ひ、ひぎっ、バチって、バチバチってえええっ！」

膨らんだ胸を驚掴みにされ、ギチギチに張り痲った乳首を掌内で転がされる。魔姫は甘い遠吠えを放った。

「はきや……はきやうううううっ！」

もはや、誰が誰だか認識できない。ただ入れ替わるペニスの形だけを感じる。横腹を撫でてくる挿入者のカリ首付近が、太い肉棒が膨れ上がり、精を放出した。「つく、きやひっ……ひやううう……っっ！」

女の酒盃に火種を注がれた魔姫は肉棒が硬いうちにと墜壁を轟かせ、今度こそはとお尻をくねらせる。

断続的に子種を吐き出す鈴口に子宮口をぶつけ、爛

れた小波に身を震わせた。だが。

(あ、まだ抜かないでえええ……)

出しただけで満足してしまった雄が早々に肉茎を引き抜いてしまい、また法悦まで跳べなかつた魔姫は、生殺しの快樂で溺死しそうな掠れた声を上げた。

「あ……ああ……えう……ふえうう……」

部屋の中央に引き摺り出されて仰向けにされた時には、シエリスの身体はすっかり出来上がってしまった。肌を染めた肢体から湯気と淫臭を立ち昇らせ、黒衣をくねらせる。腰が抜けていて立てず、捲れ上がった陰唇から無残に大量の精液が流れ出す。十体の魔物が数歩の距離を取って周囲に輪になり、取り囲んできた。

(私……まだ一度も達していない……)

細胞の一片一片まで快樂に冒され、体温で溶けてドロドロの肉に変わってしまった。頭も熱にやられたようで、潤んだ瞳で見上げる天井が近くなったり遠くなったりする。もう正気など保ちたくない、墮ちて

しまいたい、と心が嘔くまでに弱らされた遊戯の贄にゾフィアが圧しかかり、肌を撫でながら唄ってきた。

「一つお前に教えてあげましょう、シエリスエルネス。この淫らな肉体の名は雌犬。この浅ましい心の名は雌犬。この弱く脆い魂の名は雌犬」

使い込まれた乳房とヴァギナを紅く腫れさせ、痛々しく淫らに枷の嵌まった胸を上下し、仰向けで頤を揺らしながら、それでもシエリスは尋ねた。

「……あ、後、何回、ですの……」

「ひ・み・つ。だけど頑張ってるから、私から」（褒美）
軽快に立ち上がったゾフィアが壁のレバーを引いた。その途端、不吉な駆動音が地底の底から響いてきた。組まれた石がずれていき、シエリスたちを乗せた床が円形に沈み込む。被虐の魔姫をさらなる奈落に誘い込まんと、床が彼女を呑み込んでいき、筒状の縦穴の中に閉じ込めた。深さはそれほどない。獲物の少女が正座をすれば肩が元の床の高さと一致する程度だ。

「感謝しなさいシエリス。お前の奮闘の成果が床の染

みで終わらないようにしてあげるのだから」

親切な触手たちが、壁や床に残留している魔物たちのスペルマを掻き集めて穴の中に流し込んできた。精液風呂だ。縁から垂れる、まだ熱を維持しているザーメンが、蛞蝓なめこの大群の如く這いずって底に溜まっていく。

身体全体で息する魔姫は、疲労で床に縫い留められた蝶の標本だった。姦視線の滅多刺しに、両眼を目の根元に寄せて耐える彼女の、蝶々結びの紅リボンが後頭部から剥がれ落ちる。拡がって一筋一筋床に貼りつく紫髪が、卑汁を滴らせて石畳の隙間に流れ込んでいく。

ペットリと漆黒のゴシックドレスの貼りついた腹部や上膊は力なく床に横たえられ、雄たちに灼熱の陵辱の続きをせがむかのようにか細く震えている。木柵の上では絞られた乳房が上向きでも形を崩さず、頂点で勃起した乳首は豊潤な母乳を滲ませていた。

スカートの黒生地は、斜めに切られたガラスの如く

傾いて一纏まりになり、右脚の下敷きになりながら、真つ赤に紅潮した左脚を完全に露出させていた。

蛞蝓の波が黒衣を包围し、攻め寄ってきた。石畳の見える円の範圍がどんどん狭まっていく。

最初に接敵した魔翼が嫌悪感で痙攣した。魔姫を汚す意欲に満ちた白い膿が、力なく広げられた黒い光沢を放つ筋や赤紫色のビロードの如き皮膜に、雄液独特の生臭さと怖気立つ温かさで絡みついてくる。

(……一度床についたのに、まだ熱い……っ)

紅い靴が腐って粘つく液体を追い散らすようにカッカと床を蹴るが、すぐにその音がビチャビチャというものに変わってしまう。今まで己を汚してきたザーメーンに再び臀部を包まれて、魔姫は恥辱に震えた。自然法則すら捻じ曲げる魔が、穴を満たす単純な液体の運動に被虐を感じて身悶えてしまっている。

(せ、せーえきなんかで、お肌がふやけちゃうう……)

紅いリボンに蛞蝓が触れる。髪を濡らしている物と成分が同じなので、すんなりと紫の至宝に染み入って

くる。大きく波打ったチョーカーの鬘が、窪に流れ込んできた液体に浸った。生温い悪寒が長耳の先を浸し、耳の裏に這ってくる。自分の紫髪にびちゃりとうなじに貼りつかれたシエリスは、髪を犯されるのに耐えかねて起き上がった。すると、肩のパフをがっしり掴まれて、背後に引き寄せられる。不浄の肉門に急角度で聳え立つ男根をあてがわれた。

「やあつ、待つて——きゃひいいいっつ！」

背後で胡坐をかけた魔物に、ペニスを肛門に捻じ込まれた。腫れ紅い臀部が、肉棒を受け入れて張り詰める。男の膝の上で潰れて、痙攣した。直腸を抉り掻き回されたシエリスは、口元に手を当てるが歓喜の声を抑えられず、指の隙間から嬌声を漏らす。

「あ……はう、はおううう……っ」

べたんと座り込んだシエリスの脹脛は、すでに白濁の海に小さな島を作るのみだった。

(こんなの、あんまり……あんまりですわ)

そう思うのに、お湯で薄めた糊の如き感触と、白濁

に浸かる己の夢想到興奮してしまふ。全身の毛穴が開き泥のような官能の汗を流し出す。男が床から掬ったザーメンを胸にかけられた魔姫は、精液塗れにされる被虐感に歓喜の身震いをし、秀麗な貌を恍惚に呆けさせながら、自分が限界にきていることを悟った。

(も、もう駄目えええ、これ以上こんなゲームを続けていたら、戻れなくなるっ！)

伸びてくる腕を振り払い、シエリスは叫んだ。

「も、もういひいっ、おやめなさいっ、は、離れてっ！」

——よろしいので？

手首を掴まれ両側に開かされ、鼻先にペニスを突きつけられた。傲慢な薄笑いをする男が、それを手で扱く。あろうことか、鼻先に射精された。

「はぷっ、ぷあっ！」

濃厚な雄の匂いを嗅がされて、頭の芯が麻痺していく。魔姫の瞳がトロリと潤むのが合図だったかのよう。雄の魔物たちが襲い掛かってきた。

左耳にペニスを擦りつけられ、右耳をしゃぶられる。アナルを突かれて顔を上げると、鼻先に幾本もの男根を突きつけられた。どこを向いても肉棒だ。頭上からは触手が射精を繰り返し、縦穴の水位を上げてくる。雄棒の香りに溺れながら、少女は頭を横に振りまくった。

「ふあああっ、いいって、言ってる……！ 離れ……！」

——本当によろしいので？

枷ごと左右に振られる乳房。萎れて垂れたドレスから、ホワイトペーストをかけられた双乳が露出してゐる。それを掴まれ、揉みしだかれる。容器で冷やし固めてから逆さまに型抜きして落としたゼリーの如く震える乳球は、粗野な男の掌に蹂躪されて、甘ったるい高熱で蕩かされながらブルブルと跳ねた。

穴の縁から、泥遊びの如く触手たちが精液を放ってくる。左乳房が鷲掴みで嚙られ、左右の乳首が男の唇に挟まれる。尻に大きな舌が這いずり弄ばれ、ぶっくら膨らんだ乳輪や乳首を強く何度も吸引された。

「ん！ んううう、ふきゅうううううつつ！」

肢体に電撃を受けてシエリスは仰け反った。首を背後からアナルを犯してくる男の肩に押しつけ、天井に顔を向ける。口に指を突き入れられる。乳首を取り外そうとでもいうのか、指でコリコリと弾かれた。

「い、いいのおっ、いいから、早くうううう！」

——本当の本当に？

無数の手が伸びてきて、魔姫のブラックドレスにふやかしたセラチン状のザーメンを塗りたくってきた。お腹に肩に首筋のチョーカーに。捲れ上がったスカートに突き込まれた腕が、邪魔なショーツの股布を横に引っ張り、淫華を野太い指で掻き回してくる。白肌を快感で粟立て、ぬるりとしたドレスを男たちに擦りつけて、乱暴に尻尾を掴まれたシエリスは肉風呂で喘ぐ。白く濃度の高い湯船の中で、官能のツボを突かれ続けるシエリスの踵が何度も底を蹴った。腰が動いてしまい、ペニスを咥え込んだ窄まりから気泡が出る。

「や、やめっ、離れっ、あ、ああ、ああうううううう

……いいいいいいつつ！」

——やはり、よろしくないのではありませんか。再度言い直そうとしたが、声が出せなかった。

「う……あ……？」

悦楽に煮立つシエリスは自分がゲームを続けようとするあまり、肉体の限界を読み誤っていたと気がついた。もうとつくに、身体は自制を離れていたのだ。

——ゲームを続けます、続けたいのですね、お嬢様。——
「ちが、ちひゃあああ、らめ、ひゃううう……」

不明瞭な言葉しか紡ぎ出せなくなった魔姫は、首を振って返答にしようとする。だが口に入れられた指がそれを許さない。アナルに激しい突き上げを喰らう。

「ひゃ、ひゃあう……あああ——つつ！」

肛門を掻き回されるままにお尻の山の形が崩れた。肉棒の鼻先で直腸粘膜をミキサーにかけられて腸液を搾り取られるような悶絶的な快感に支配される。一瞬気が遠くなり、悦の直撃を受けた少女は口をばくばくさせた。その弾みで顎を縦に動かしてしまう。

——コクン。

——では続けます。

耳元で低く囁かれ、魔姫は愕然とした。

「ちひやううつ、くひつ、くひいいいいっつっ！」

全身の急所を締め上げられ、直腸を抉られる。喜悅

が彼女の深い所で渦を巻き、否定の動きを奪った。

「あが……あがあああ……はひいつ、はひんう！」

肉棒を激しく抜き差しされると、直腸に燃える蠟燭

を啜えたような悦楽が生じ、熱い昂ぶりの涙が流れ出

る。荒々しく腰を揺すられ背骨や頸椎を痺れで骨抜き

にされ、魔姫の頭がマリオネットとなつて縦に動いた。

——コクン。

(ち、違う……違う……つ)

首を横に振り直そうとしたが、その前に突き上げが

来て狂わされる。為すがままに操られる性玩具の頭上

から、嘲笑うように触手の白濁が降り注いだ。

——では続けます。

神経を桃色の火花でスパークさせる魔姫への、再度

の力強い宣言。鋭敏になつた皮膚にざらつく舌を押し

当てられたシエリスは、おぞましい快楽に囚われて押

し殺した悲鳴を上げた。しかしそれすらも長く唇から

漏らすことは許されない。口腔に捻じ込まれる野太い

男根が白濁を吐き出し、彼女の気管を塞いできたのだ。

すでに精液風呂の中身は、咳き込む獲物の腰まで溜

まつている。衣裳と肌との間に空気が入つて丸く盛り

上がっている箇所にも膿が染み入り、臍が呑み込まれ

た。

白濁の海面には、男の膝の上でM字開脚をするシエ

リスの腰から上と、膝だけが出ていた。菊座に突き上

げがある度に折れそうなるほど頼りなく上体を揺らす魔

姫の下半身は、すでに肉棒という支え無しでは立てな

いほどに、グズグズに快楽に溶かされている。

無力化された気高い少女のドレスに手掬いされたザ

ーメンがかけられ、掴んだ衣服を雑巾にして腹部の肌

を磨き込まれ、煩悶に鳴かされる。木枷も露出した乳

房も精液ローションに覆われ、まなじり 臍を下げてよがる少女

の鼻先に誰かの放出が塗され、鼻梁を垂れ流れた。

「くあ、くああああ、かひゅうううううう……っ」

縦穴として窪んだ、淫らな鳥籠の中で身悶える黒鳥。穴の縁へと伸ばした腕を掴まれ、引き戻されて肉棒奉仕に従事させられる。男根の卑熱を染み込まされた腕は叱られた子供のようにピクンと跳ね、素直になつてしまう。飛ばうと広げられた黒羽には、皮膜が破れそうなほど強く肉棒を押しつけられた。龟头をキュッキュと擦られると、背筋に軽く針を刺されるようなゾワゾワとした恍惚が胸の奥から溢れてくる。

肉棒から逃れんと持ち上がった腰は、横腹を撫でられただけで腰砕けになり、逆に臀部を男の膝に押しつけ潰れる。お尻でスタンプを押すかのように動き出す。「あ……はん、はあ、んうっ！」

乱れた黒衣を半脱ぎにする魔姫は、脱皮をする蛇の如く白皙の肌をくねらせる。肉付きのよいうら若い美肢体は、男に責め廻られるままにうねり、湯気と淫臭を立ち昇らせている。目を瞑って生唾を呑み込みなが

ら、シエリスは肉の屈服を自覚していた。

「今のは聞かないでいてあげる。遊戯を続けなさい」
床に寝そべったゾフィアが縁から穴の中に腕を伸ばし、獲物の顎を掴んで上に向けさせてきた。掬った精液を魔姫の口に流し込み嚙下させながら、微笑む。

「もう言わなくても分かっているわよねえ？ お前は誰かに奉仕してもらえる立場じゃないって。頑張りなさい。もしお前がゲームをクリアできたら、本当にランセリイは返してあげるから」

快楽に打ちのめされたシエリスには、進める道はそれしかなかった。雄獣たちが顔を寄せてくる。狙いを悟った性奴隷は、氣を利かせて言わなければならぬ。「キ、キスを、シエリスは皆様の口づけが欲しいです」
屈した少女の唇を男たちが次々と奪っていく。主君の唇をレイプした者共は、今度はあろうことか口腔に火照った肉棒を捻じ込んできた。

「ふあ、う、嬉しいですわ、ご主人様の肉棒……っ」
女主人の努力を無下にしながら、シエリスの角を掴



んで前後に揺さぶる。白濁した膿を掻き分けて魔姫の前に立ったのは、継ぎ接ぎの魔物だった。壁際の情事を思い出した彼女の頬が紅く染まる。

ニヤリと笑った怪物の竿に舌を這わせる。拳ほどの亀頭の先端にある切れ込みの縁を円を描いて舌で撫でる。そうしつづつ徐々に巨根を口に含み、桜色の朱唇で、肉色の棍棒を呑み込んだ。亀頭を頬張っただけで限界に近い少女の口に、さらに胴体が押し込まれる。

——ズル、ズル、ズググウウ……

「ふぐうううううう、うぐ、んぐううううつつ」

殆ど動かせない舌で男性器にある縫い痕を労わるように舐めながら、脳に重しを入れられたような感覚を覚える魔姫は、雄に征服される味に酔った。歯を立てないよう顎の力を抜くと、軟体生物と化した口腔を女の洞の如く扱われ、被虐的な喜びが満ちる。

(す、凄い匂いですわ……)

汗と雄垢で練られた卑臭を嗅がされているうちに、頭に淫らな靄がかかっていく。頭上からは触手が射精

を繰り返し、縦穴の水位が腰から胸へと変わっていった。雄香に溺れる魔姫は、呑み込みきれない竿の部分をも、両腕で扱く。腰のグラインドと反対方向に腕を動かすようにしていると、筒肉に血管が浮き上がり、大きく跳ねた。

——ジュビユンッ、ビュバァッ！

粘つくほど濃度の高いザーメンが、喉の奥で渦を巻いていた。限界まで唇を開けて肉棒で栓をされているシエリスは、喉に詰まった雄汁を吐き出すことができず。それどころか、鳥もちのようになった白い塊はべったりと咽頭に貼りついて、息を塞いできた。

「ん……ん——！」

(息、息ができませんの！)

男の太腿をどんどん叩くシエリスに構わず、怪物が続けて抽送を開始する。喉を塞がれた魔姫の暴れようが心地よかったのか、二度目の射精はすぐに訪れた。

——ドビユッ、ドビユッ、ビュクン！

「うんううううううう——つつ！」

——ゴクン、ゴクン、ゴクン。

咽頭に詰まっていた白濁塊が、二度目の射精流に圧迫されて胃へ落ちていく。ゲル状に凝縮された子種の感触が肋骨の内部に広がった。身震いがし、今は何者の挿入も受けていないヴァギナがきゅんと締まる。

「っ、かはっ、げほっ……ふあ、ふあむうううう」

正面からだった角度が変えられ、顎を上げさせられた魔姫は、斜め上方から喉の奥へと抽送を受けた。後頭部が巨大な掌に掴まれ、顔に跨りかかった雄獣の腰が、グチャグチャと卑猥な湿音を立てて上下に揺すられる。陰毛に覆われた肉棒の根元が、眼前で急速に接近離脱を繰り返し、揺れる醜悪な睾丸から汗が散る。

——ゲゲ、欲しいでございますか、お嬢様……。

いつの間にか男の腰をすがるように掴み、首を軽く捻って口内粘膜を暴虐のシンボルに絡みつけていたシエリスは、精液湯船で内脚を擦りつつ目で訴えた。開いているうちに慣れて余裕のできた口唇の隙間に涎と精液を塗り、肉棒の竿を滑らかに刺激する。

持久力の怪物がゲラゲラ下品に哄笑し腰を振った。

——ゴビエウウウウウウウツツツ！

口腔を一杯に開いた魔姫の咽頭目掛けて、ホース水流がぶちまけられた。瓶のラッパ呑みの姿勢を強要され、気管が詰まり噎せ返る。ゲホゲホと咳き込んだ唇が白い滝を落とし、生臭いスperlマを吐き出した。

鼻腔の奥にまで粘ついた白濁が侵入する。まるで鼻水のように美しい鼻から這い出る液体を除去しようとする少女だが、肉風呂と化した穴の中でそんなことができよう筈もない。そこに横からいやらしい笑みを浮かべて接近したラッパの如き口吻を持つ魔物が、連続三回の口内射精を受けたシエリスの鼻に吸いつき、ズツとわざと音を立てながら、鼻腔の中にある物を全て吸引してきた。羞恥と嫌悪のあまり悲鳴を上げたのも束の間のこと、異性に身体の間々まで犯される興奮に折れてしまった魔姫はそれを許してしまう。顎を掴まれ開かされた口に巨軀の怪物が、まだ大量に腰に残っているザーメンを流し込んできた。

——コクッ、コクン、ゴクッ。

身体の内外を雄の膿に埋め尽くされていく魔姫は、三回目にして漸く昂ぶりの鎮まった肉棒が口から引き抜かれるのを、熱く呆然とした瞳で見送った。鈴口から垂れる白い河を名残惜しそうに眺める彼女は、次に唇に肉棒を押しつけてきた魔物にも応じてしまう。

「あ、あああああつつ……ん、うあ……」

常識外れの魔物と触手たちが盛んに精を吐き出すのだ。すでにスペルマはシエリスの胸にまで溜まっている。抜け出せない快楽の蟻地獄に落ちた魔姫は理性をクタクタに柔らかくしていた。

嚙下したまろやかなザーメンが喉にへばりついた。

「ん、んあ……」

魔姫は両腕を垂らし、雄たちの願望を満たす道具に成り下がる。チューリップ型のシオルダーパフの半分がザーメン風呂に浸かり、繊維の隙間という隙間に雄の子種が満ち、濡れていたドレスがまだ半濡れだったのだと思いき知らされていた。全身に腐った海苔が貼り

つく。濡れて縮んだ木製の枷にますます締められ、張り詰めた重い乳房は浮力で心なしか浮いていた。

息が荒い。まだ達することはできていなかった。身体の中で、何か爆発が起きているかのように、断続的にシエリスは肢体を跳ねさせていた。

「ふあ、あ……っ」

鼻にかかった声を出し、精液を吸い上げる紫髪を妖しく光らせる。小波のような快感の余韻がぶつかりあい、大波に化けて魔姫を呑み込もうとしていた。

——お嬢様。

突然声をかけられたシエリスはびくつとした。

——お嬢様、何かお望みは御座いませんか？

(イ、イかせて欲しい……)

生殺しの快楽の中で魔姫は煩悶と苦悶の涙を流し、柔らかく張りのある肢体をしきりにくねらせていた。

——何もお望みは御座いませんか？

(——墮ちたい、墮ちたい、墮ちたいっ、存分に歓喜を味わいたい！)

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>